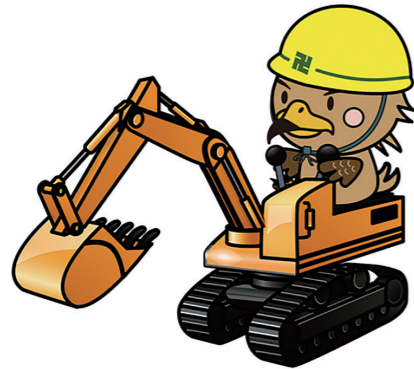


本丸東面石垣の積直し工事

工事は、東面石垣約100mを北と南に工区分けし、令和2年度から北側工区積直し工事の準備に入り、令和6年度までに修理範囲全体を積直す計画です。積直す石は2,185石で、大きいものは長さ約2m・重さ約6tもあります。この作業を行うのは、石工と呼ばれる専門の職人です。

また、天守台石垣と天守には、大地震時の被害を防ぐための耐震対策を講じます。

なお、発見された埋没石垣等については、記録等を残したうえで再び埋設状態で保存します。



令和3年(2021)6月
石垣積直し開始

石垣修理のスケジュール

※関係機関との協議や作業の進捗等により、変更になる場合があります。

- 【平成26年度】◆内濠の埋め立て工事
- 【平成27年度】◆天守曳家工事
8月16日から10月24日までの期間で、天守を約70m本丸中央側に曳家。
- 【平成28年度】◆石垣解体工事着手
石垣の解体に向けて、石垣の番号付け、墨入れ、仮設足場等の準備工を実施。
- 【平成29年度】◆石垣解体工事
4月9日から12月9日までに、1,233石を解体。
◆本丸の発掘調査
石垣の解体と同時進行で石垣背面の発掘調査を実施。江戸時代の井戸跡・排水跡を確認。
- 【平成30年度】◆石垣解体工事
5月8日に石垣の解体を再開。10月で全ての解体完了(延べ2,172石)。
◆本丸の発掘調査
江戸時代前期の埋没石垣等を確認。
- 【令和元年度】◆内濠の発掘調査(令和2年度まで実施)
積直しの検討に必要な石垣下部の状況を把握するため実施。内濠石垣等を確認。
◆石垣解体と発掘調査結果に伴う積直しの検討及び実施設計
- 【令和3年度】◆石垣積直し工事(北側工区)開始
◆石垣修理範囲北端の13石を追加解体
- 【令和5年度】◆石垣積直し工事(南側工区)開始
◆天守基礎耐震補強工事開始
- 【令和6年度】◆石垣積直し工事完了予定
- 【令和8年度】◆天守基礎耐震補強工事完了予定
◆天守曳戻し予定
- 【令和9年度】◆本丸外構整備予定



破損石材の補修作業

ひろさき応援寄附金(ふるさと納税)

【特別コース】

弘前城天守がお引越し!世紀の石垣大修理
~石垣普請応援コース~
<https://www.city.hirosaki.aomori.jp/jouhou/seido/hitokuchijyosyu.html>



弘前市マスコットキャラクター
たか丸くん

【お問い合わせ先】

弘前市都市整備部公園緑地課

メールアドレス: kouen@city.hirosaki.lg.jp

〒036-8356 弘前市大字下白銀町1(弘前公園 緑の相談所内) TEL:0172-33-8739 FAX:0172-33-8799

令和5年(2023)7月31日発行



平成26年(2014)4月撮影

史跡津軽氏城跡弘前城跡

弘前城本丸石垣修理

本丸東面の石垣には膨らみが確認されており、崩落の危険性があることから、修理工事を進めています。

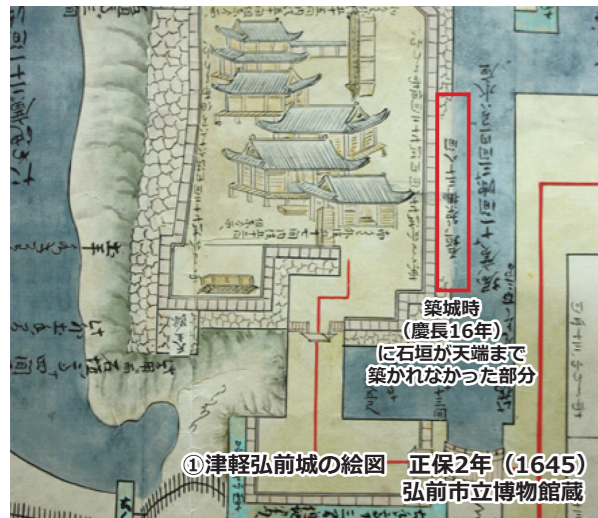


令和5年(2023)4月撮影

弘前城は、弘前藩初代藩主・津軽為信ためぶにより築城が計画され、2代藩主信枚のぶひらの時代、慶長16年(1611)に完成しました。本丸・北くるわの郭・二の丸・三の丸・四の丸・西の郭の6郭で構成された平山城で、規模は東西約500m、南北約1,000m、総面積約50haに及び、国の史跡に指定されています。濠ほりは三方・三重に巡らされ、西側は蓮池と、元は岩木川の流路であった西濠に守られています。

築城当初の天守は五層であり、本丸南西隅に位置していましたが、寛永4年(1627)の落雷により焼失したと伝わっています。現在の天守は文化7年(1810)、9代藩主寧親やすちかが櫓造営やぐらの名目で再建したもので、本丸南東隅すみやくらに位置しています。日本に現存する12の天守のひとつに数えられており、5棟の城門・3棟の二の丸隅櫓すみやくらとともに重要文化財に指定されています。

弘前城本丸東面石垣の歴史



①津軽弘前城の絵図 正保2年(1645) 弘前市立博物館蔵



②如来瀬の石材



③大正4年の石垣修理(弘前市蔵)

弘前城では、主に本丸の周囲に石垣が積まれています。慶長16年(1611)築城時、本丸の石垣は一部分が天端まで築かれておらず、正保2年(1645)の絵図には「石垣ノ築掛三十八間」と記されています(図①)。この部分の石垣築造が始まるのは、築城から約80年後のことで、弘前藩4代藩主信政のぶまさの時代です。

元禄7年(1694)5月、藩は石垣築造について幕府から許可を得て、7月に起工式である「御鋤初おくわはじめ」を行っています。同年9月より本丸南西隅にある未申櫓台から普請(工事)を始め、翌年6月には本丸東面石垣の普請が本格化しますが、この年弘前藩は冷害による凶作から大飢饉となり、8月には普請を中断します。飢饉の影響も残る元禄12年(1699)3月に藩は本丸東面石垣普請を再開し、5月に石垣が完成しました。

当時、石垣に使う石材は岩木山麓より運搬しており、石材の採掘・割り出しをした作業場を「石切丁場いしきりちょうば」とよみました。「弘前藩庁日記(国日記)」には、元禄の本丸東面石垣築造の際、如来瀬(弘前市)から切り出された石を牛車で運んだとの記録があります。如来瀬には、石切職人が石を切り分けるために付けた「矢穴やあな」跡のある石が今でも残されています(写真②)。

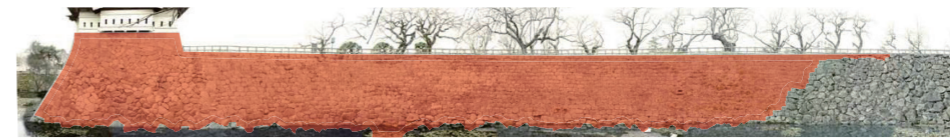
元禄の普請から約200年が経過した明治27年(1894)と明治29年(1896)、天守台北側の石垣が崩落します。明治29年の崩落後は、そのまま放置すると天守まで倒壊する危険性があったため、翌年に弘前市出身の大工棟梁・堀江佐吉ほりえ さきちが天守を本丸内部に曳家しています。石垣が修復されたのは、曳家から18年後の大正4年(1915)のことでした(写真③)。

平成から令和の石垣修理

昭和58年(1983)5月の日本海中部地震を契機として、翌年から本丸東面石垣の定点観測を開始します。平成12年度と15年度には「石垣概要診断調査」を実施し、その結果、石垣の膨らみが明確となりました。また、このまま石垣の変位が進行すると地震等の衝撃により、石垣が崩壊する危険性があるとの報告も受けたことから「石垣修復計画」を策定し、平成19年度から地質調査・3次元測量・地下水位観測等の基礎調査に着手します。

平成20年度には、歴史・石垣・耐震等各分野の専門家で構成される「弘前城跡本丸石垣修理委員会」を組織し、基礎調査で得られた様々なデータをもとに検討を重ね、平成23年に石垣の解体修理が決定し、平成26年度より実際の工事に着手しています。

◆修理範囲(東面)



◆修理範囲(南面)



本丸東面石垣の解体と発掘調査

平成29年4月9日より着手した弘前城本丸東面石垣の解体工事は、平成30年10月26日に最後の1石を取り外し、終了しました。解体する際には石材に番付けしており、最終的な解体石材数は2,185石です。石垣の解体中には、新たな発見がありました。



④

〔井戸跡(写真④)〕 井戸跡の掘方は直径約9mの楕円形をしており、東側に長さ約5m(4~8石)、高さ8m(11段)にわたる石組を伴っていました。東側の石組11段目付近の深さで、掘方中央部に二重の木製井戸枠が発見されました。木枠は正方形で、外側が一辺1.7mほど、内側が一辺1.2mほどです。外側の木枠と内側の木枠の間には砂が詰められており、壁から流入する泥水をろ過する働きがあったと考えられます。



⑤

〔排水跡(写真⑤)〕 排水跡は、石垣の中段に設けられた蛇口から、本丸での生活排水等を内濠へ流した施設です。蛇口背面の暗渠(地下水路)は石でつくられていました。暗渠の下部には元禄期の構造が残り、上部は19世紀以降につくり直されていました。



⑥

〔埋没石垣(写真⑥)〕 本丸東面の北側では、西側(本丸側)へ延びる石垣が見つかりました。この石垣は、自然石を積み上げた「野面積み」という積み方でつくられていました。元禄期の石垣より前につくられており、出土遺物や絵図等の史料より、17世紀中頃から寛文13年(1673)の間に築かれた石垣と考えられます。



⑦

〔桐木と内濠石垣(写真⑦)〕 石垣の沈下を防ぐため、石垣下部に据える木材のことを「桐木」と言います。弘前城本丸石垣でも、発掘調査で桐木が確認されています。桐木は一辺24cm程度の角材で、樹種はヒノキ科アスナロ属とクリです。また、天守台東面下の内濠では、石垣の前面に巨石を用いた低い石垣(写真⑦)が確認されました。これは本丸南東隅の櫓台下の土台を補強するため、築城時に設けられたものと考えられます。